

# ROBODEX 2003 セミナーレポート

ROBODEX2003ではセミナーも実施された。主立ったものを、いくつか簡単にレポートする。

もりやま かずみち  
森山 和道 (サイエンス・ライター)

## 基調講演：ロボットと人間 ～物とは人間にとって何か～

まず自在研究所所長で東工大名誉教授の森政弘氏が基調講演を行った。森氏は、ロボコンでの生徒の変化等具体的な話題を通し、物と人間の付き合い方は「内側の問題」と述べた。物との付き合い方は人間の考え次第だ、ということだ。生徒たちはロボコンを経験することで、アイデアの重要性をはじめとして、これまでとは違った眼差しでロボットや機械を見ることができるようになる。それがつまり「内側の問題」だ。



基調講演を行った森政弘氏

森氏は「あらゆる物は役に立たないのではなく、役立てることができないだけなのです。大昔はあらゆる物が役に立たなかった。たとえば電気もそうだったが、人間が役に立ててきたのです。物を先生として人間が育つことができるのです」と述べ、ロボットからは色んなことを学ぶことができると講演をまとめた。

## 第1回ロボットビジネス会議

～ネットワークにロボットがつながる時、新たなサービスが生まれる～

続いて初日は、司会にノンフィクション作家の山根一眞氏、ホンダ、三菱重工、富士通、ソニーの研究者4人が登壇。家庭内にネットワーク接続されたロボットが入ること、そしてその結果、どんなサービスが展開されるかについて議論が行われた。

まずそれぞれが自社のロボットとサービス構想について解説した。詳細は省くが、SDRについての話は注目だった。富士通の神田氏が「MARON-1」などネットワー

クにつなぐタイプのロボットの今後について「コンテンツ課金等の問題もある」と話を締めくくったのに対し、ソニー・表氏はあくまで可能性としての話としながらも「たとえばSDRの会話の中に広告を入れることもありえる」と述べた。また、ユーザーとの会話をすることによって、ユーザー個人の好みを探り、それに応じたサービスを展開することもできるのではないかと語った。ネットワークにつながり、能動的に動き回ることのできるセンサー、コンピ

ュータとしてのロボットの可能性の1つではあるが、考えさせられる問題でもある。

4社の話を受け、山根氏は「ロボットに対して真面目すぎるのではないかとコメントし、チケット手配などネットワークサービスを受けるために、なぜわざわざロボットを介する必要があるのかといった根本的な質問を投げかけた。4氏はそれぞれ、ロボットというインタフェースのほうが携帯電話などよりも対人親和性が高いことを理由に挙げた。また、ホンダの配川氏は



司会を行ったノンフィクション作家の山根一眞氏



左から三菱重工の日浦亮太氏、ホンダの配川有二郎氏



左から富士通の神田真司氏、ソニーの表雅則氏